

イタリア王国～イタリア共和国における宗教史学

江川 純一

1. はじめに

前世紀を代表する宗教学者といえるミルチャ・エリアーデはこのような言葉を残している。

だれが私の「師」または「モデル」であるかとの質問に対しては、常に R・ペッタッツォーニと答えて、以下のように説明しています。私は彼から、いかになすかではなく（彼は歴史主義者です）、なにをなすのかを学んだのです。ペッタッツォーニはその生涯をかけて、宗教の普遍史を築こうとしました。このことは偉大な教訓でした。それゆえにイタリアには幾人かの宗教学者がいるのです。フランスやドイツ、イギリスにはいまだにいないにもかかわらず。若い世代では、当面、あなたやブルース・リンカン [Bruce Lincoln] の名があげられます（ジョナサン・スミス [Jonathan Smith] は四〇歳近い...）。

エリアーデのクリアーナ宛て書簡、1977年5月3日。奥山史亮『エリアーデの思想と亡命——クリアーナとの関係において——』、北海道大学出版会、2012年、256頁より。

エリアーデは1920年代初めにペッタッツォーニの著作（*Dio: formazione e sviluppo del monoteismo (vol. I: L'Essere celeste nelle credenze dei popoli primitivi)*, Bologna: Zanichelli, 1922.）に触れ、宗教史学という学問を明確に意識した。彼は1926年にペッタッツォーニに最初の手紙を書き¹、二人の交流はペッタッツォーニが亡くなる1959年まで続いた。エリアーデには「イタリアの神話化」がみられるため、彼の言葉については割引いて考える必要があるが、エリアーデが複合学ではない宗教史学の「モデル」をペッタッツォーニに、そしてイタリアの伝統にみていたことはもっと注目されてよい。

エリアーデが「イタリアには幾人かの宗教学者がいる」と述べていたように、イタリアは「non confessional (aconfessionale)」な宗教史学が制度的にも研究者の内面的にも確立し受け継がれてきた例外的な場である。イタリア半島で展開した宗教研究（「イタリア宗教史学²」）についての研究者を欠いてきたため³わが国ではほとんど知られていないが、誇張を恐れずにいうなら、イタリアこそが宗教史学の中心地である。

イタリア宗教史学の祖とされるのはラッファエーレ・ペッタッツォーニ Raffaele Pettazzoni (1883-1959)である。イタリア宗教史学が「宗教史学ローマ学派 La scuola romana di Storia delle religioni」と呼ばれることがあるのは、ペッタッツォーニが教員を務めたローマ大学「ラ・サピエンツァ」の文学部に宗教史学者たちが集まり、「学派」（のようなもの）を形成したためである。だが、ペッタッツォーニは「無から ex nihilo」生まれたわけではない。いうまでもなく前史が存在する。本稿では、イタリア王国成立以前にまで遡り、イタリア宗教史学の歴史的展開を跡づきたい⁴。

2. なぜイタリアでは国立大学で神学を学ぶことができなくなったのか？

19世紀イタリアの状況を簡単にみておきたい。所謂「リソルジメント risorgimento⁵」が展開する時期であるが、リソルジメントは「イタリア国家統一運動」のことではない。中世都市国家時代の繁栄を理想化し、イタリアの現状と未来をより良くしようとする動き全般を指す言葉がリソルジメントであり、国家統一運動はそのなかから起きてきた流れである。1848年、サルデーニャ王国によるオーストリアとの第一独立戦争の際、ピウス9世（在位1846-78）が戦争に関わることを拒否（1848年4月29日の宣言）したため、教皇を首長とするイタリア国家建設（ヴィンチェンツォ・ジョベルティ）の可能性が消滅した。北原敦は「（この宣言は）こののちイタリアのナショナルな運動が反教皇の性格をおび、また教皇がナショナルな問題の前に立ちふさがる原因となった」北原敦編、『イタリア史』、山川出版社、2008年、381頁と述べている。

1861年、サルデーニャ王国が他国を併合するという形でイタリア統一が達成される。諸国が同等の立場で国を作ったわけではない点が重要である。したがって、首都はサルデーニャ王国の首都トリノ、イタリア国王はサルデーニャ王国国王であるヴィットーリオ・エマヌエーレ二世、イタリアの憲法はサルデーニャ王国憲法であるアルベルト憲法、イタリア王国初代首相はサルデーニャ王国の元首相カミッロ・カヴール Camillo Benso, conte di Cavour (1810-1861)という状態が生み出された。また、ローマ（ラツィオ）とヴェネツィア（ヴェネト）が王国に含まれていない点も見逃せない（ラツィオは教皇領、ヴェネトはオーストリア領であった）。カヴールが正式化した「自由な国家における自由な教会」という政教分離主義をイタリア王国も採用し、一方、教皇庁は80の命題：汎神論、自然主義、合理主義、自由主義、宗教に関する無関心、社会主義、共産主義などを誤りとして指摘した『シラプス』(1864)、さらには第一ヴァチカン公会議(1869-70)という形で対抗した。こうした、教皇庁とイタリア政府との聖俗にわたる覇権争いは「ローマ問題 *Questione romana*」と呼ばれている。

1870年7月、普仏戦争が勃発。フランス軍がローマから引き揚げる隙をついて、イタリア政府は教皇庁にヴァチカンの明け渡しを求めた。しかし、ピウス9世はこれを拒否し、イタリア軍はローマに進軍（「ローマ併合」）。王国議会は1871年5月に「保障法」⁶を制定し、これにたいし教皇庁はカトリックの信仰者が王国の選挙に携わることは相応しくないとする「ノン・エクスペディト」で対抗した。

こうした状況のなか、1873年1月26日、イタリア王国議会は全国立大学の神学部廃止を決定した。当時、17の国立大学のうち11大学が総合大学で、神学部を設置していた（トリノ、パヴィーア、ジェノヴァ、ピーサ、パドヴァ、ボローニャ、ローマ、ナポリ、メッシーナ、カタニア、パレルモ）⁷。公教育大臣、チェーザレ・コッレンティ Cesare Correnti により提出され、後任のアントニオ・シャローヤ Antonio Scialoja のもとで成立したため、「シャローヤ＝コッレンティ法」と呼ばれるこの法律の中身は、全国立大学の神学部を廃止し、神学部で行われてきた教育を文学部キリスト教史学科に移し、新カリキュラムにするというものであった。が、実際には教員として神学部のスタッフがそのまま残った。そのため、神学の研究が弱められた上に、新しいディシプリンが急速に展開されることもなかった。

実はこの神学部廃止令には次のような背景があった。サルデーニャ王国では、カヴールが反聖職者主義の左派と組んだことから教育の世俗化が始まっており、1855年5月の法によって多くの修道院の閉鎖が決定されていた。統一後、この法の効力は全国に広げられ、神学部は慢性的な学生不足と、経済的危機に悩まされていたのである（1869-1870年には王国の9つの学部に16人、1870-1871年には4人）⁸。ここからいえることは、ローマ問題の顕在化により、19世紀後半のイタリアを覆っていたのは反カトリックというよりも、カトリックにたいする無関心であったということである。ここから二つの流れが発生する。一つはカトリックの改革運動と位置づけることが可能な「近代主義 *Modernismo*」、そしてもう一つは、宗教の複数性を志向する「宗教史学 *Storia delle religioni*」という思考である。

3. 近代主義と宗教史学はどこが違うのか？

「近代主義（モデルニズモ）」とは1907年7月3日の教皇ピウス10世（在位1903-14）による回勅『ラメンタビリ』に登場した言葉であり、「すべての異端の総和」として弾圧の対象になった運動である。一般にはキリスト教の研究を近代の要請に合わせようとする試みと捉えることが可能であり、具体的には福音書の批判的研究、キリスト教の起源、ヘブライズムと他のセム宗教との関係、宗教哲学などが挙げられる。回勅『パスケンディ』でも否定（「宗教の価値の歪曲」）され、異端狩りの秘密組織「ソダリティウム・ピアヌム」は破門を楯に取り締まりを行った。

イタリアの近代主義者はA・ロワジーやG・ティレルの影響を受けている。その代表は活動家のロモロ・ムッリ *Romolo Murri* (1870-1944)、キリスト教史学のエルネスト・ブオナイウティ *Ernesto Buonaiuti* (1881-1946)である。両者の経歴を簡単に記しておく。ムッリは「社会における教会」の立場からキリスト教民主主義運動を起こした。1893年に司祭になったが、聖職者のより深い知性の形成の必要性を説き、紛争のなかで破門。1902年8月24日の講演「自由とキリスト教」で、彼は聖書研究と歴史研究の刷新を切望した。彼の改革思想は、多くの司祭たちを惹きつけた（司教区の削減、禁書目録の手続きの修正、神学校と伝統的方法の改革、聖職者の独身制廃止など）。1907年職務停止、1909年破門。雑誌『文化』創刊。1909年以降は国会議員、1913年からはジャーナリスト。1943年に教会と和解。一方、ブオナイウティはカトリック信仰と歴史批評的研究との架橋を試みた。1903年に司祭になり、グレゴリオ大学 *Pontifica Università Gregoriana*（1551年創立）の教壇に立った。『パスケンディ』に対抗した『近代主義者提要 *Il programma dei modernisti*』が禁書になり、大学を追われ、1915年からローマ大学へ。1921年に職務停止、1924年破門。1931年にはファシスト政権への宣誓を拒否し除職。晩年まで教会との和解はなかった。

近代主義者たちの思想を以下のようにまとめることができる。① 歴史批評的研究の重要性を指摘、② 個人の主体性を重視（宗教体験を大切にする）、③ 神学は未来の解釈に向って開かれていると捉えるべきと主張、④ 学問研究の自由を主張（自然科学、歴史学）、⑤ 教会は現代の価値を認めるべき（民主主義、人権、信教の自由）と主張。

二つの流れのもう一方、宗教史学について考えるためには、1873年法下の各大学文学部の状況を検討する必要がある。新カリキュラムの最初の実施場所は、ナポリ大学であった。国会での

審議中にフィリッポ・アヴィニエンテ Filippo Avignente (1814-1887)が「教会史 *Storia della chiesa*」のポストに呼ばれた。アヴィニエンテは 1861 年以来ナポリ大学の神学部で同講義を担当していたが、文学部においては当然、初めての試みであった。このポストにアヴィニエンテが選ばれた理由は単純なものであった。彼が議会の呼びかけに最初に反応し、神学部で行われていたドグマ的教育に代わる宗教史学をイタリアの大学のカリキュラムに取り入れるという提案を熱烈に歓迎したためである。講座名が「教会史」であるため、ユダヤ教やキリスト教以外についての宗教を扱うことは同講義に求められていなかった。それでも彼は講義のなかで仏教、古代エジプト宗教、中国の宗教、ミトラ教、パールシー教に触れ、さらには比較神話学という新しいディシプリンをも紹介している。アヴィニエンテは 1860 年に聖職を破棄していたが、司教座聖堂参事会員 *canone* の地位にまで達しており、彼の「宗教」理解は全くキリスト教的なものであった。他宗教をキリスト教と同等の位置に置かなかったアヴィニエンテにおいて「宗教」という概念の進展はみられなかった⁹。

1876 年にアヴィニエンテが退官すると、神学、哲学、歴史学を学んだラッファエーレ・マリアーノ Raffaele Mariano (1840-1912)がその後任に指名された。しかし、その就任は 1885 年まで延期されることになる。教会側と議会の一部からのシャローヤ=コッレンティ法への反抗があったため、ポスト自体は存続したが 8 年間もポストが空いたままにされた。1886 年に出版された就任講義『国家と宗教教育 *Lo stato e l'insegnamento della religione*, Napoli, 1886』のなかで繰り広げられる主張のロジックは明快である。マリアーノは、大学においては神学校とは異なる教育が目指されなければならないとする。神学校とは聖職の育成機関であり、神学的な標準に合致した教えがなされる。しかし、大学においては「現在の宗教的眞実」が考慮されるべきであり、そのためにはキリスト教にたいする批判的研究だけではなく、非キリスト教にたいする検討も必要である。ごく簡略化するとマリアーノの主張は以上のようなものである¹⁰。マリアーノは教会史、近代カトリシズムなど講座名そのものに関する研究のほか、仏教の紹介も行い 1904 年に退官した。マリアーノにとって、「宗教」とはカトリックであるが、非キリスト教にも目が向けられており、キリスト教と仏教との比較も試みられている。「宗教 *religione*」の傍らで「諸宗教 *religioni*」の存在が認められているのである。彼のこのような言葉が残っている。「イタリアはひたすら待つしかない。偉大で喜ばしいソルジメントについての私のヴィジョンは未だ実現していない¹¹」。時が経てばイタリアに「宗教史学」が実現する。マリアーノはそう考えていた。

次に、シャローヤ=コッレンティ法が決定された地へと移ろう。ローマである。1883 年、ローマ大学文学部に「キリスト教史 *Storia del Cristianesimo*」の講座が生まれ、ピアサ大学の倫理哲学の教授であったバルダッサレ・ラバンカ Baldassare Labanca (1829-1913)がその教授に就いた。1886 年(マリアーノの就任講演の翌年)、講座は「宗教史学 *Storia delle religioni*」という名称となる。それ故、ラバンカには「イタリアにおける最初の宗教史学の教員」という説明文が付与されるのである¹²。しかしながら、三年しないうちにラバンカは自ら公教育大臣に接近し、講座名を「キリスト教史」に戻してしまう。「キリスト教史」の名称は 1892 年に同大学にキリスト教史講座が誕生するまで変更されなかった。その理由についてジョーダン、ラバンカがかつて聖職に就いておりキリスト教的信条の優越に親しんでいたこと、老齢もあり新しい学問を構築する意欲に欠けていたことを挙げている¹³。ラバンカの専門はキリスト教史であったが、「比較」に関心

を抱いていた。「比較宗教史序説 " Prolegomeni alla storia comparativa delle religioni " in *Coenobium*, 1909」のなかでこう述べている。

長い間、特に中世において、諸宗教の歴史研究は無益とみなされていた。それは異教の人々に最高の尊敬を与えるものであった。つまり、聖書を信じない者の行いは無益であると。宗教的憎悪は以下のような見解を生み出した。すなわち、他のどの宗教もすべて間違っており宗教的信仰ではない。キリスト教ただひとつを除いて、他の宗教の歴史研究は無益、いや、むしろ有害であると。(中略) 今日においても、文献学のアカデミックな実践として宗教史学を行うことは無意味もしくはあまり利点がないと捉えるものが多い。(中略) 人々は、宗教が人類の古代史や現代史の三分の二を占めるということを認めない。さらに、宗教的事実が厳正な学問の対象となるとき、それは人間精神についての探求から導き出される非常に重要な歴史的・文献学的問題を含むということも認めないのである。

巧みなレトリックが用いられた文章である。否定文の使用が緩衝となり断定が避けられている。つまり、単なる状況の説明と捉えることも可能で、言説が積極的な主張を含むものとならないように配慮されている(ただし、カトリックや「宗教」にたいする無関心について語られている点を見逃してはならない)。ヴァチカンの反応をみて講座名を変えたラバンカならではの文章である。ラバンカは歴史的批評的研究の重要性を意識し、宗教史学の存在意義を考えていた。しかし、ただそれを意識し、その意義を考えていただけで、自らがそれを積極的に推進するつもりはなかった。「諸宗教」という概念を拡げ深めるような研究はラバンカにはみられない。次のような言葉が残っている。「数ヶ月前、私は宗教学についての一卷をフランスから受け取った。イタリアは？ われわれはそれを後世に残そうではないか！」。

ラバンカが亡くなった年(1913年)に大学教官資格を獲得したペッタッツォーニが、結果的にその遺志を実現させることとなる。ペッタッツォーニは1912年に、当時のイタリアの研究状況について、もっと視野を広げる必要があるとしたうえで、このように述べている。

すべての宗教現象に等しく関心を向ける必要がある¹⁴

ペッタッツォーニは一年間ローマ大で「宗教史学」の講義を担当し、1914年から23年までは母校ボローニャ大で宗教史学の講義を行う(ただし給料が発生したのは1919-20の一年間のみ)。

現代の宗教学者 P・A・カロツィは「イタリア初の宗教学者」の座をウベルト・ペスタロッツァ Uberto Pestalozza (1872-1966)に与えている¹⁵。1912年にミラーノ・アカデミーに宗教史学の講義が開設され、それを担当したのがペスタロッツァであるというのがその理由である。ペスタロッツァはキリスト教史ではなく古代史の研究者であった。古代ギリシア・ローマにおける「宗教」をみることで、キリスト教的なそれとは異なる宗教の在り方を考察しようとしたのである。『地中海の永遠なる女性的なるもの *Eterno femminile mediterraneo*, Vicenza, Neri Pozza, 1954(1996)』という書物はゲーテの『ファウスト』第二部結尾の合唱から発想を得た書物である。これは、古代ギリシアのパンテオン以前に、地の母・大地母神 (la terra madre) への崇拝が地中

海沿岸にみられ、それがヨーロッパの出発点となっているという、ギンブタスの先駆として捉えることが可能な研究である。ペスタロツァが歴史的批評的研究を前に進めたことは疑いないが、彼が宗教史学を作ったとは言い難い。なぜなら彼の学問が「宗教」、「諸宗教」という概念の上に成り立っているわけではないためである。ペスタロツァは、1936年に創設されるミラーノ大学の宗教史学講座を担当することになる¹⁶。

ここで、大学別ではなく研究分野という視点からイタリアにおける宗教に関する研究をみてみよう。神学部廃止から19世紀の終わりごろまでに、以下のような研究者が存在した¹⁷。

○神学部廃止から19世紀の終わり頃まで (グループ α)

神話、インド=ヨーロッパ語族宗教の G・トレツァ Trezza。ヴェーダ神話研究の A・デ・グーベルナティス De Gubernatis。神話学の T・ヴィニョーリ Vignoli。ダヴィデ研究の G・バルツェロッティ Barzellotti、古代キリスト教研究の A・キアッペッリ Chiappelli。メソポタミア・古代キリスト教研究の G・ネグリ Negri、オリエント学の M・ケルバケル Kerbaker、古代イスラエル研究の D・カステッリ Castelli。ギリシア神話研究の D・コンパレッティ Comparetti、V・プントーニ Puntoni。中世異端思想研究の F・トッコ Tocco、教会史の A・クリヴェッルチ Crivelluci、そしてアヴィニエンテ、マリアーノ、ラバンカ。

20世紀、それも1910年代以降、下記の研究者たちが大学で宗教関係の講義を講じ始める。

○1910年代以降 (グループ β)

宗教史学の R・ペッタッツォーニ Pettazzoni、S・ミノッキ Minocchi、N・トゥルキ Turchi。キリスト教史の E・ブオナイウティ Buonaiuti、A・ファッジョット Faggiotto、A・オモデーオ Omodeo、A・ピンケルレ Pincherle、U・フラカッシーニ Fracassini。古典宗教のペスタロツァ Pestalozza。インド・極東宗教の A・カステッラーニ Castellani、C・フォルミーキ Formichi、P・E・パヴォリーニ Pavolini、L・スアリ Suali、G・トゥッチ Tucci。バビロニア・アッシリア宗教の G・フルラーニ Furlani。ユダヤ教の U・カッスート Cassuto、I・ゾッリ Zolli。イスラームの M・グイーディ Guidi、G・レヴィ・デッラ・ヴィーダ Levi Della Vida、C・A・ナッリーノ Nallino。古代エジプト宗教の G・ファリーナ Farina。

α と β の差異は「宗教」概念 (宗教史学¹⁸) と「東アジア研究」であり、これらはそのまま近代主義と宗教史学の差異でもある。興味深い事例が存在する。キリスト教史のブオナイウティ、トゥルキ、フラカッシーニ、古代エジプト宗教のファリーナ、古典宗教のペスタロツァ、そして宗教史学のペッタッツォーニ (皆、グループ β に含まれていた研究者達である)、1916年に彼らは『宗教学雑誌 *Rivista della Scienza delle Religioni*』という雑誌の刊行を始める¹⁹。神学的=護教的な方向性を大きく踏み外し、歴史批評的立場に立った同誌は教皇庁検邪聖省 Sant'Ufficio²⁰の検閲対象となり、教皇ベネディクト 15 世のもと 1916年4月11日の発令によって糾弾され、同年6月禁書処分を受けた。したがって同誌は二巻で廃刊となった。この時点でペッタッツォーニはカトリックの協力者を得ようとしていたことが分かる。しかし、ブオナイウティとトゥルキは、

聖職停止 *sospensione a divinis* を解除するためにモデルニズモを捨てることを決め、教皇庁への態度を硬化させることはなかった²¹。トゥルキは、カトリック当局の同意を得た新しい雑誌を始めしたが、ペッタッツォーニは、科学はすべての宗教に開かれていなければならないとしてこれに加わらなかった。教皇庁はペッタッツォーニにたいし無関心を装い、彼の著作は無視された。こうしてペッタッツォーニはカトリックのリベラルな研究者からも一歩距離を置くこととなる。

4. 宗教史学講座設置とペッタッツォーニ

ペッタッツォーニはボローニャ大学で古代史と考古学を学んでいたが、在学中に日本の宗教に関心を抱いたことがきっかけとなり宗教史学の研究を開始した²²。卒業後、ローマの民族誌博物館の調査官として就職。非常勤の講義を担当した後、1923年、ファシスト政権のバックアップを得て、ローマ大宗教史学講座教官に就任した。彼とともにイタリアの宗教史学は以下のように大きく動く。1925年にはC・フォルミーキ、G・トゥッチと雑誌『宗教史学の研究と資料 *Studi e Materiali di Storia delle Religioni*』刊行。1926年には講座が宗教史学科となり、宗教史学、キリスト教史、聖書考古学、イスラームの諸制度の全体的な研究が開始。1931年、「インド・極東の宗教と哲学 *Religioni e Filosofie dell'India e dell'Estremo Oriente* 講座」創設。1951年、イタリア宗教史学会 *Società italiana di storia delle religioni* 設立。(国際宗教史学会会長時代の)1954年には『ヌーメン *Nvmen*』とその補完『宗教史研究 *Studies in the History of Religions*』刊行。

本章では宗教史学講座誕生に関し、ジェンティーレ、クローチェとのあいだでいかなるやりとりがあったかを記しておきたい。

1912年の『サルデーニャの原始宗教』の段階で、ペッタッツォーニは既にイタリアにおける宗教史学の必要性を訴えていた。彼の次の課題は、自ら播種した新しい学問を大学講座に定着させることにあった。ペッタッツォーニにポストを与えたのはファシスト政権である。講座設置までの経緯は、ペッタッツォーニと哲学者ジェンティーレとの往復書簡²³で辿ることができる。ジェンティーレはナポリ、パレルモ、ピーサの各大学で哲学・哲学史を担当した後、1917年からローマ大の教壇に立っていた。彼は初期クローチェと相互影響関係にあり、クローチェが1903年に創刊した雑誌『クリティカ *La Critica*』に積極的に関わっていたが、10年代半ばに「純粹行為としての思惟行為」によって認識と行為の絶対的統一を打ち出してからは、クローチェとの間に思想的な「ずれ」が生じていた²⁴。

ペッタッツォーニのジェンティーレへの接近は思想的共鳴からではなく、クローチェにたいする憤慨からであったことを、1922年8月8日付けの書簡から窺い知ることができる。

一度目（に私の希望が打ち砕かれたのは）1920年でした。公教育上級委員会 *Consiglio Superiore della Pubblica Istruzione* はボローニャにおける宗教史学講座の申請をいったん認可しました。しかし大臣は何も行わず、それどころか私の非常勤のポストは無給のそれに該当するとして、給料までも取り除きました。なんと最初の六年間分も！ 大臣はB・クローチェでした。私は内心の慷慨と、思想界とイタリア文化において高い地位にある者から反対され

た私の努力（それには値しないかもしれませんが）をみたときに覚える深い後悔とをあなたに申し上げずにはられません。

本年、(中略) ナポリの教会史講座のポストが空きました。宗教史学は未だなしです。常にあるべきではありません。いつまででしょうか？²⁵

ペッタッツォーニは、学の将来にたいする不確かさは研究の意欲を削ぐとして、当時公教育大臣であったA・アニーレに開設を働きかけてくれるよう、ジェンティーレに請願している。ジェンティーレは、ナポリ大の教会史講座へのペッタッツォーニの応募と、ローマ大文学部に宗教史学講座を新しく創設する案の両方を視野に入れ模索をはじめた。1922年10月28日、ムッソリーニの「ローマ進軍」。同31日、ジェンティーレは第一次ムッソリーニ内閣に公教育大臣として入閣した(ファシスト党への入党は翌23年)。状況はペッタッツォーニに有利に動く。同年12月3日の法律によりジェンティーレに教育改革の全権が委ねられたのである²⁶。ナポリの講座はブオナイウティ派によって操作され、キリスト教史のアドルフォ・オモデーオ(1889-1946)に決まったが、12月、ジェンティーレはまずローマ大学に宗教史学講座新設を決め、翌年その教官としてペッタッツォーニを委員会に指名させた。

しかしジェンティーレは、ペッタッツォーニの政治的な協力者ではあっても、宗教史学の理解者ではなかった。ペッタッツォーニから著作『神』を送られ書評の依頼を受けたジェンティーレは、『クリティカ』1922年9月号の書評欄で取り上げている。その内容は見事にペッタッツォーニの急所を突いたものであった。ジェンティーレによると、宗教概念抜きで宗教史学は行えない。

一般的に宗教(または諸宗教)についての史学や民族学そして科学は、それらが扱う題材についての定義を捨象するのであれば、不可能である。この点についてペッタッツォーニが注意を払っているようにはみえない。彼の議論と研究の進行はこの点を痛感するであろう。²⁷

ペッタッツォーニは9月23日付けの書簡において、宗教概念抜きで宗教史学は行えないという指摘は正しく、自分自身それを試みていると認めている。しかしそのすぐ後で「もし何らかの定義に至ってもそれに満足することはないだろうという危惧がある²⁸」と付け加える。そして、現時点では「直観的・表象的認識に属する、概念的思考とは異なる神話的思考が宗教の本質であると考えている」と述べている。

ジェンティーレとペッタッツォーニのあいだに思想的な一致は存在しないが、にもかかわらず、ジェンティーレはペッタッツォーニのために宗教史学講座を用意した。ジェンティーレによる宗教史学講座設置は、クローチェにたいする腹いせだったという(サツバトウッチが紹介する)見方は採用できないが²⁹、結果的にペッタッツォーニはクローチェとジェンティーレの対立関係を利用して、イタリア初の宗教史学講座を得たと捉えることが可能である。

思想的に大きな影響をペッタッツォーニに与えたのはクローチェである。精神のみが唯一の存在であるとしたクローチェは、精神は常に発展するものであり、現実はその発展における一過程をあらわすとした。そして、人間の精神活動を四つのカテゴリーに区分し、その区分と循環性を明確に保持した。精神活動全体は四つのみに分かれるのであるから、それら以外は考慮に値

しない。四つとは、認識に基づく理論的活動と、意思に基づく実践的活動を、それぞれ個別と普遍に分けたもので、理論的活動における「美（個別：美学）」と「真（普遍：論理学）」、実践的活動における「有用（個別：経済学）」と「善（普遍：倫理学）」である。注意すべきは理論的活動において、概念的認識（真）の前段階に直観的認識（美）が置かれていること、同様に実践的活動において道徳的活動（善）の前段階に功利的活動（有用）が置かれていることである。すべてのカテゴリーは同等でどれか一つに特権的な地位が与えられてはならない³⁰。主観における統一・合一を目指したジェンティーレとの差違がここによくあらわれている。そして最後に最も重要なこととして、精神活動は歴史として理解されねばならないとクロウチェは考えた³¹。

さて、クロウチェは『クリティカ』誌上の書評欄で早速、出版されたペッタッツォーニの講演を取り上げた³²。ペッタッツォーニがそのストリチズモの模範としたクロウチェが告げたのは宗教史学の全面的な否定であった。まず彼はペッタッツォーニが付与した普遍性を批判した上で、宗教史学は科学とはいえないと断言する。なぜなら「この百科全書的な前提では、広大な領域のすべてを支配する不可能性、また宗教史学のなかにすべての必要な作業を結合する不可能性を避けずにはいられない」ためである。さらに、宗教史学は「科学的・批評的流れとは逆の、編集された流れとでも呼べるもの」であり評価できないとする。書評は以下のように締めくくられている。

実は宗教史学とそれに関係した講座は、思弁的必要性や道徳的必要性から今日のイタリアに得られたものではない。単なる広い知識の必要性のため、このような教養においてイタリアが他国から遅れた状態に留まらないようにするという理由によってのみ、もたらされたものである。（中略）要するに、図書館のコレクションを完全なものにしようと努力する態度なのである。ともかくすべての宗教の百科全書的展示の点ではまったく新しい機会であろう。

33

クロウチェのいう「編集された流れ」が比較方法を指すものと捉えれば、クロウチェ・ペッタッツォーニ間の齟齬の原因となっているポイントは、宗教の自律的価値と比較方法の是非である³⁴。四つのカテゴリーの絶対性に固執するクロウチェにとって、宗教はどこに位置づけられるのか。精神のカテゴリーに宗教が置かれていたジェンティーレのそれとは異なり、宗教が占める場所はない。クロウチェによると宗教は概念によってではなく、カテゴリー外の神話から構成される。それは人間の幼児段階の特殊性であり、生の哲学の概念を歩むことによって自動的に超えられる³⁵。クロウチェの関心は精神の発展としての歴史自体にあり、宗教は研究対象ではなかったのである。晩年の論文でペッタッツォーニはこう書いている。

ベネデット・クロウチェとその学派——オモデーオが追従した——にとって、宗教は精神の自律的な価値ではない。宗教史は思想史や倫理的生の歴史のなかに溶解してしまい、固有の実質を持たない。³⁶

ペッタッツォーニはクロウチェの精神の哲学の核ともいえる四つのカテゴリーの区分は受け容

れなかった。クローチェにとっての「精神」がペッタッツォーニにとって「宗教」であったからである。ペッタッツォーニは宗教を最優先する。なぜなら宗教は人間の生に最も強く結びついている³⁷ためである。

ペッタッツォーニはクローチェから、ストリチズモを受け取った。この場合のストリチズモとは以下のようなものである。超歴史的（つまり普遍的で絶対的）な公準や価値は生じない。すべての物事や制度は歴史のなかでのみ存在の意味や価値を持つ。それゆえ物事の起源や性質を、それぞれの物事が表出されている歴史のなかで考える。しかしながら、デ・マルティノーが「クローチェの地平はヨーロッパ、西洋文明であり、とりわけウマネジモとルネサンス以降であった³⁸。」と述べているように、クローチェの思想の有効範囲は極めて限定的なものであった。ペッタッツォーニは、すべての宗教は歴史的コンテキストによって条件づけられていると捉えたが、あらゆる比較を拒否するクローチェの思想はペッタッツォーニには閉鎖体系であると映った。クローチェの思考では歴史の複数性を説明できず、外に開いていく可能性が失われてしまうのである。その打開策としてペッタッツォーニが採用したのが歴史的比較という方法であった。つまり、クローチェのストリチズモに対象の面で宗教、方法の面で比較という新たな項目を加えたのがペッタッツォーニであるといえる。

多くの論考はクローチェがペッタッツォーニの宗教史学を批判した点のみの指摘で終わっているが³⁹、実際の状況はやや異なる。クローチェは同誌の次号において態度を変化させ、「間接的ながら」宗教史学への「期待」を表明しているのである⁴⁰。彼は宗教史学が博学の必要性にたいする反応に過ぎずいかなる思索的批評的内容も有しないとした点について、過小評価であったと認める。そして、確かに宗教史学の理論的内容を否定したが、研究対象そのものを拒絶したわけではないとし、より良い研究にするために「対象そのものを拡大して欲しい」と望み、二点を指摘する。一点目は、宗教史は人間の数多の実践的傾向の歴史（倫理—政治史、道德史）に溶解するが、そこにはいくつもの象徴や精神的運動に加え、つい最近その宣告を聞いた「ファシズムという宗教」があるのではないかということ。もう一点は、神話について。神話は哲学史に溶解するが、様々な宗教の神学者の議論や、哲学者がなおざりにしている諸問題に関して、哲学史を豊かにするのではないか。これらのクローチェの言葉は何を意味しているのか？ それは、最終的にはこちらで（哲学が）処理するから、宗教史学は宗教についての事例を豊富に提示して欲しいということである。言い換えるなら、「宗教」というカテゴリーや、宗教史学の方法論は認められないけれど、対象の方には可能性があるということである。

「単なる百科全書的知識に過ぎないのではないか」、「比較を組み込むのにそれでもなお歴史だといえるのか」、「対象を扱う、学独自の方法があり得るのか」、宗教史学開帆時にクローチェが投げかけたこれらの問題はいまなお宗教史学に重くのしかかっている。

5. 宗教史学ローマ学派と現況

ペッタッツォーニは弟子に恵まれていた。ローマ大学に宗教史学講座が開設され10年が経過した頃、後にペッタッツォーニの後継者となる学生たちが、ペッタッツォーニのもとで学び始め

る。最初はエルネスト・デ・マルティーノ Ernesto de Martino (1908-1965)であった⁴¹。彼はナーポリ大のキリスト教史家アドルフォ・オモデーオと市井の哲学者クローチェに学んだ後、オモデーオの推薦状を持ってローマにやってくる。西洋文化のみの説明にとどまるクローチェのストリチズモに限界を感じていたデ・マルティーノは、歴史主義的民族学を模索することになる。南イタリアのタランティズモの調査・研究で知られ、カリアリ大で宗教史学・民俗学を教える。エリアーデへの理論的影響が大きい。また、デ・マルティーノはレジスタンス出身で、共産党の理論家であった。主著は『民族学における自然主義と歴史主義 *Naturalismo e storicismo nell'etnologia*, Bari: Laterza, 1941』、『悔恨の地・再び嘔まれた地 *La terra del rimorso: Contributo a una storia religiosa del Sud*, Milano: Il Saggiatore, 1961』。邦訳されているものとしては、デ・マルティーノ、E. (上村忠男 訳)『呪術的世界 歴史主義的民族学のために』、平凡社、1988年がある。

次にやって来たのは、後にペッタッツォーニの講座を引き継ぐことになるアンジェロ・ブレリチ Angelo Brelich (1913-1977)であった⁴²。1913年にブダペストで生まれたブレリチは、ブダペスト大学のカール・ケレーニイのもとで古代ギリシア学を、アンドラス・アルフェルディのもとで考古学を学ぶ。1931年にイタリアに渡り考古学の研究を続けるが、このイタリア留学にはケレーニイからの影響だけではなく、彼の父がイタリア系であったことが関係していると思われる。1935年にはケレーニイの紹介でペッタッツォーニに会い、本格的に宗教史学の研究を行う。ペッタッツォーニのもとでのブレリチの最初の研究テーマは「ローマ帝政期の墓碑にみる死の諸相」であった。ブレリチは古代ギリシア・ローマ宗教の専門家になり、宗教事象のコンテクストに着目する研究を行うこととなる。代表作に『宗教史学概論 *Introduzione alla storia delle religioni*, Roma: Ateneo, 1966』、『宗教史学：目的は？ *Storia delle religioni: perché?*, Napoli: Liguori, 1979』、『ギリシア人と神々 *I Greci e gli dei*, Napoli, Liguori, 1985』などがある。近年、新たに編まれた論文集も刊行されている。

40年代になると、43年にまづウーゴ・ビアンキ Ugo Bianchi (1922-1995)⁴³、が、次いで45年にヴィットーリオ・ランテルナーリ Vittorio Lanternari (1918-2010)がペッタッツォーニのもとで学部から学び始める。ビアンキの最初のテーマは「紀元一世紀におけるエフェソスのアルテミス崇拜」で、ビアンキもブレリチ同様、古代ギリシア・ローマの宗教を主たる研究領域とし、グノーシス主義や二元論的思考の歴史に関する研究を行った。メッシーナ大を経て1974年からはローマ大宗教史学講座を受け継ぐことになる。ミラーノ聖心カトリック大学でも宗教史学を担当し、I・P・クリアーナの師となった。『宗教史学の諸問題 *Problemi di storia delle religioni*, Roma: Studium, 1958』や『民族学の歴史 *Storia dell'Etologia*, Roma: Abete, 1965』、『宗教的二元論 *Il dualismo religioso*, Roma, 1983』が代表的な仕事であろう。ペッタッツォーニ学派では例外的な信仰者で、一時期、非キリスト教徒のためのヴァチカン事務局顧問を務めた。

一方、ランテルナーリは『サルデーニャの原始宗教』を読んで宗教史学に惹かれ、ペッタッツォーニのもとにやって来た。最初の研究テーマは「オーストラリアのイニシエーション儀礼」で、後に彼はガーナと南イタリアで調査を行いながら、カリスマ、救済、秘儀についての研究をより人類学的な方向に進めた。彼はバーリ大で宗教史学と人類学を教えた後、ローマ大に移っている。『抑圧された人々の解放と救済の宗教運動 *Movimenti religiosi di libertà e di salvezza dei popoli oppressi*, Milano: Feltrinelli, 1960』(堀一郎、中牧弘允 訳『虐げられた者の宗教——近代メ

シア運動の研究——』、新泉社、1976年)、『大祝祭 *La grande festa: Vita rituale e sistemi di produzione nelle società tradizioni*, Bari: Dedalo, 1976』、『宗教人類学 *Antropologia religiosa, Etnologia, Storia, Folklore*, Bari: Dedalo, 1997』、『環境人類学 *Ecoantropologia: Dall'ingerenza ecologica alla svolta etico-culturare*, Bari: Dedalo, 2003』がある。ユダヤ系の共産主義者であった。

ペッタッツォーニの「最後の弟子」とされているのが、ダーリオ・サッバトゥッチ Dario Sabbatucci (1923-2002)である。サッバトゥッチは古代ローマ宗教を専攻し、ローマ大宗教史学の教授となった。宗教概念批判の影響を受け、宗教概念を古代ローマから考えることを主張。ドイツのハンス・G・キッペンベルク、ブルクハルト・グラディオウらと協力関係にあった。彼らは aconfessionale な宗教学宗教史学の拠り所としてサッバトゥッチを頼った。主著は『古代ローマの宗教 *La religione di Roma antica: dal calendario festivo all'ordine cosmico*, Milano: Il saggiatore, 1988』、『宗教史のパースペクティヴ *La prospettiva di storico-religiosa: fede, religione e cultura*, Milano: Il saggiatore, 1990』。

ペッタッツォーニをはじめとする宗教史学ローマ学派に共有されていたものとは何であろうか。まとめて代えて五点指摘しておきたい。

① 非信仰者

:ペッタッツォーニが無神論者であったことは有名だが、彼の主要な弟子達も政治的には左派で、ビアンキ以外は無神論者であった。

② 古代ギリシア・ローマを必ず研究対象に含めること

:「キリスト教以前」に拘っているためだと考えられる。神学との差異の意識も存在するであろう。また、ペッタッツォーニには自らの学問がイタリアの人文科学に連なっているという意識があった。そしてとりわけヴィーコとの繋がりを重視していた⁴⁴。たとえばこのような言葉である。「未開の人々における最高存在という私の概念は G・B・ヴィーコに遡る純粋にイタリア的な思考の伝統に結びついている (Pettazzoni, 1922, p.XX)」。

③ 「宗教的なもの」、「聖なるもの」を人間の所産として捉えること

:ペッタッツォーニは亡くなる直前にノートにこう記している。「結局、理想世界を作るのは常に人間である。人間世界を作るのは超人間的な世界ではない。創造者を(無から!)創造するのは人間なのである。⁴⁵」彼は「宗教的なもの」や「聖なるもの」を否定的に理解したのではなく、人間の産物だからこそ人文科学の対象であり、独自の学が必要であると主張した。イタリアの宗教史学が「世俗の学」と言われるのはこの点を大切にしているためである。

④ 歴史的コンテクストを最重要視すること

:彼らは常に自らの学問を「宗教学 *Scienza delle religioni*」ではなく「宗教史学 *Storia delle religioni*」と称する。ペッタッツォーニが『古代ギリシアの宗教 *La religione nella Grecia antica fino ad Alessandro*, Torino: Boringhieri, 1953』改訂版の序文に記した、「あらゆる現象は(歴史的)生成物である ogni phainómenon è un genómenon (p.11)」にこの姿勢があらわれている。「宗教的なもの」

や「聖なるもの」を歴史的に限定づけられたものとして捉え、社会的経済的条件との関わりで検討するというペッタッツォーニの姿勢は、結果として、宗教史における進化主義的・伝播主義的な決定論的理解を退けることに繋がった。

⑤ 比較の可能性を常に念頭に置くこと

：神話、儀礼、最高存在、犠牲、タブー、罪の告白、祈り、聖職者、終末論といった問題系について、一つの現象の比較にとどまらず、時間における諸現象の連なりについても比較を行う。これはペッタッツォーニから弟子達に受け継がれているものである。ただし、問題系はカトリック的であるに注目したい。

最後に現況を紹介しておきたい。2011-12年、宗教学宗教史学の講義が行われているのは62大学のうち以下の34大学である⁴⁶。

Torino, Genova, Bergamo, Milano, Milano-Bicocca, Pavia, Trento, Padova, Ca' Foscari di Venezia, Trieste, Udine, Bologna, Parma, Firenze, Pisa, Perugia (per stranieri), Urbino, Macerata, Roma "La Sapienza", Roma Tor Vergata, Roma Tre, Cassino, Chieti "Gabriele d'Annunzio", Aquila, Molise, Napoli "Federico II", Napoli "L'Orientale", Salerno, Bari, Salento(Lecce), Basilicata, Calabria, Messina, Cagliari

そのほか、グレゴリオ大学 Pontificia Università Gregoriana、ミラーノ聖心カトリック大学 Università Cattolica del Sacro Cuore di Milano でも行われている。宗教史学の教員が複数いるのはローマ大学「ラ・サピエンツァ」とトリノ大学。ローマの一極集中とあってよい状況であり、一般に、Storia delle religioni という名称の場合、ローマ学派系であることが多い。それ以外に Storia religiosa、Scienza delle religioni、Scienza religiosa といった講義が存在する。

一般的に宗教史学は衰退の傾向にある⁴⁷。国家の文化予算減少に伴い、歴史学系の講座が縮小されており、宗教史学も例外ではない。正規講座が文化人類学に置き換えられる事例もみられる。ローマ大学も2010/11年より、学部レベルの名称が「宗教史学」から「歴史・文化・宗教学部 Dipartimento di Storia, Culture, Religioni」に変更となった。

イタリア宗教史学のいくつかのピークはイタリア国家が抱える問題と連動しているといえる。たとえば、近代主義者達の主張を第二ヴァチカン公会議に接続したものとしてペッタッツォーニ宗教史学を捉えることが可能であるし、彼の学問は宗教上の無関心の打破や、1950年の「信教の自由」運動と表裏一体であった。また弟子のデ・マルティーノやランテルナーリの学問は南イタリア問題と強く結びついていた。現在は宗教史学にたいする社会的要請が少ないが、宗教と教育の問題に突破口を見出そうとしている研究者が存在する（ローマのサッジョーロなど）。

「イタリア現代思想」にみられる、(哲学・美学出身者による)カトリック神学とより強く結びついた宗教論はイタリア宗教史学とは異なる流れである。だが、近年は神学者もペッタッツォーニに関心を寄せているし(Mihelcic, *Una religione libertà: Raffaele Pettazzoni e la scuola romana di storia delle religioni*, Roma: Città Nuova, 2003)、宗教史学の必要性を最も強く説いているのは、隣接学であるキリスト教史の研究者たちである(トリノのフィローラモなど)。2000年代になり「ペッタッツォーニ・ルネサンス」と呼ばれる流れが起きており、ローマ大学文学部の雑誌『宗教史学の研究と資料 *Studi e Materiali di Storia delle religioini*』の2011年の特集号は「ラッ

ファエーレ・ペッタッツォーニと宗教史学」である。細分化されてしまった宗教学宗教史学において、ペッタッツォーニ宗教史学の歴史主義と比較が持つ意味は何か。総合的な宗教研究はまだ可能か。その検討が始まっている。

註

- 1 Spineto, N., 1994, (a cura di) *L'histoire des religions a-t-elle un sens? : correspondance 1926-1959*, Mircea Eliade, Raffaele Pettazzoni, Paris: Cerf, pp.89-92.
- 2 ここではある宗教（もしくは、ある場所における宗教）の歴史を「宗教史」、宗教についての歴史的な研究を「宗教史学」と呼びたい。つまり「イタリア宗教史 (Storia religiosa d'Italia)」とはイタリア半島における宗教の歴史であり、「イタリア宗教史学 (Storia delle religioni in Italia / Scienze storico-religiose in Italia)」とはイタリア半島で展開した、もしくはイタリア語を用いて行われた、宗教を対象とする研究のことである。
- 3 日本語に訳されたペッタッツォーニ論文は二点存在する（(野上素一訳)「西欧と日本の宗教の歴史的発達にみられる並行現象」『宗教研究』、161、日本宗教学会、1960年、68-72頁。(家塚高志訳)「至上者——現象学的構造と歴史的発展——」岸本英夫監訳『宗教学入門』、東京大学出版会、1962年、85-94頁）が、ヴィーン学派に追従した宇野圓空、棚瀬襄爾、実際にペッタッツォーニと交流のあった古野清人による若干の言及を除けば、まとまった形でペッタッツォーニの思想や生涯、全体像が紹介されたことがないのが現状である。これには二つの理由が存在するように思われる。つまり、宗教学や宗教に携わる者のイタリアへの関心はカトリックに偏り、その一方でイタリア研究者は宗教史学に強い関心を持たなかったのである。たとえば、イタリア文学者の野上素一（1910-2001）はペッタッツォーニのもとで学び、一時期ローマ大学でも教えている。しかし、彼は『宗教研究』にペッタッツォーニの講演の一つを訳出しただけで、ペッタッツォーニの学問をわが国に紹介することをしなかった。野上はボッカッチョやダンテの専門家なのであるから当然といえば当然である。
- 4 詳細は、江川純一『イタリア宗教史学の誕生——ペッタッツォーニの宗教論とそのコンテクスト——』（博士論文。東京大学大学院人文社会系研究科に提出）、2010年（2013年刊行予定）を参照のこと。
- 5 「リソルジメント」とは、「再び re、興すこと sorgimento」であり、その目的語は「過去のイタリア」である。
- 6 「教皇と聖座の諸大権の保障ならびに国家と教会の関係についての法」。教皇によるヴァチカンおよびラテラーノの建造物の所有と治外法権の保障、ならびに教皇庁の運営費の支給などを定めたもの。
- 7 Ferrari, B., *La soppressione delle Facoltà di teologia nelle Università di Stato in Italia*, Brescia: Morcelliana, 1968.
- 8 Jordan, L.H., Labanca, B., *The study of religion in the Italian universities*, Oxford University Press, 1909., Jordan, L.H., "The study of the history of religions in the Italian universities" in *The American Journal of Theology*, volume XXIII, The University of Chicago Press, 1919, pp.41-60.
- 9 Jordan, 1919, pp.45-47.
- 10 Jordan, L.H., Labanca, B., 1909, pp.12-14.
- 11 「ソルジメント」とは「興ること、発生すること」。リソルジメントとの接続が伺われる。Jordan, 1919, p.48. ナーポリの教会史のポストは、ルイーギ・サルヴァトレッリ、アドルフォ・オモデーオと続く。
- 12 Centro Studi Alto Molise, 2000, *Baldassare Labanca, Atti del Convegno di Studi*, Cosmo Iannone.
- 13 Jordan, 1919, p.49.
- 14 Pettazzoni, *La religione primitiva in Sardegna*, Sassari: Carlo Delfino, 1980(Piacenza,

-
- 1912), p.IX.
- 15 Carozzi, P. A., " L'Introduzione della storia delle religioni nell'insegnamento universitario italiano: il contributo di Uberto Pestarozza e di Tommaso Gallarati Scotti " in De Giorgi, F., Raponi, N. (a cura di), *Rinnovamento religioso e impegno civile in Tommaso Gallarati Scotti : Atti del Colloquio nel centenario della nascita*, Pubblicazioni dell'Università Cattolica del Sacro Cuore, 1994, pp.239-270.
- 16 その他、時代的に大きく後になるが、ミラーノ聖心カトリック大学には1934年に宗教哲学の講座が、ローマの教皇庁聖書研究所 (Pontefice Istituto Biblico) にも宗教史学の講座が設置される。
- 17 Pettazzoni, R., " La storia delle religioni " in *Enciclopedia Italiana*, 29, 1936, pp.32-33.
- 18 1913年、イタリア学術振興会に宗教史学部門が創設される。
- 19 ペッタッツォーニは同誌に三本の論文を発表している。「宗教学についての報告」、「未開人の宗教についての報告」、「未開人の信仰における天空存在1、プルーガ：アンダマン島の人々の天空存在」。
- 20 検邪聖省は、近代主義者を断罪した教皇ピウス10世によって1908年に異端審問所 (Santa Inquisizione) から改編された機関である。
- 21 Giusti, S., " Lo studio delle religioni: problemi di metodo " in (a cura di Giusti,S.) *Storia e mitologia. Con antologia di testi di Raffaele Pettazzoni*, Roma, Bulzoni, 1998, p.57., Mihelcic, *Una religione libertà: Raffaele Pettazzoni e la scuola romana di storia delle religioni*, Roma: Città Nuova, 2003, pp.57-58.
- 22 Pettazzoni, R., " Religioni del Giappone " in *Il Resto del Carlino*, lunedì 29, Febbraio-Martedì 1 Marzo.
- 23 Severino, V. S., (a cura di) "Carteggio Gentile - Pettazzoni" in *Storiografia*, 6, Pisa - Roma, Istituti Editoriali e Poligrafici Internazionali, 2002, pp.111-126.
- 24 二人はまず思想的に距離をとり始め、1925年にはファシズムをめぐって政治的にも決裂する。ただし1922年の時点においてクローチェはファシズムをリゾルジメントの延長と捉えており、社会秩序の回復として政権に期待していた。ベネデット・クローチェ (上村忠男訳)『思考としての歴史と行動としての歴史』、未来社、1988、110-111頁。
- 25 Severino, V. S.(a cura di), Gentile-Pettazzoni, pp.113-114.
- 26 田辺敬子「ファシズム期の教育」、ファシズム研究会編『イタリア・ファシズム 戦士の革命・生産者の国家』、太陽出版、1985、267頁。
- 27 Gentile, G., "Recensione a R.Pettazzoni, Dio: Formazione e sviluppo del monoteismo nella storia delle religioni" in *La Critica*, XX, Napoli, 1922, pp.298-301.
- 28 Severino, V. S.(a cura di), Gentile-Pettazzoni, p.115.
- 29 Sabbatucci, D., "Gli storici atipici" in *Incontro con gli storici*, Bari, Laterza, 1986, p.198.
- 30 Croce, B., *Filosofia della pratica*, Bari, Laterza, 1908, Bonetti, P., *Introduzione a Croce*, Bari, Laterza, 2000 (1984), pp.14-22. 北原敦「クローチェの政治思想」『イタリア現代史研究』、岩波書店、2002, pp.36-37を参考にした。北原はこう述べている。「クローチェが、イタリア思想界で五〇年にもわたって支配権をもちえたのは、この牢乎たる区分の理論によって、他のあらゆる思想を、一面的あるいは部分的として論破したことに負っている (p.39)」。
- 31 クローチェのストリチズモについて北原は「あらゆる物事を歴史過程の諸関係のなかで読みとるということで、歴史は進歩と発展の経過を表して、歴史を知るということは、そこに作用している人間の精神と行為を理解することであり、そして歴史を知り、歴史的な理解を持つことこそ現代を理解する最良の方法である、という考え」と説明している。北原敦「イタリアにおける近現代史研究の過去と現在」、383頁。
- 32 Croce, B., "Recensione a R.Pettazzoni, Svolgimento e carattere della storia delle religioni" in *La Critica*, XXIII, fas.V, Napoli,1924, pp.312-313.
- 33 Croce, 1924, p.313.
- 34 また、ナーポリ大の教会史講座を担当していたオモデーオ——ジェンティーレの教え子、デ・マルティーノの師にあたる——も、比較方法の妥当性と特殊な歴史科学としての宗教史学の正

- 当性は両方とも疑わしく、「絶対的に歴史に矛盾する」と反応した。Omodeo, A., *Tradizioni morali e disciplina storica*, Bari: Laterza, 1929, p.85.
- 35 Croce, B., "Le condizioni presenti della storiografia in Italia" in *La Critica*, Napoli, 1929, pp.174-175. クローチェは1938年にもこのように繰り返している。「人類の意識は、知られているように、美、真、利、善、あるいはそれらと明瞭に同義の価値以外のどのような価値の名前もかつて言表したことはなかった。そして同様に、歴史の形式についても、それら以外のどのような形式をもかつて指摘したことはなかったのであり、それらに下屬ないしは還元されなような形式をもかつて見出したことはなかったのである。もしだれかそれら以外の別の形式を見出すことができるとか提唱したいと思う者がいるならば、言ってみるがよい、試してみるがよい。」上村忠男訳『思考としての歴史と行動としての歴史』未來社、1988、78頁。
- 36 Pettazzoni, "Il metodo comparativo", in *Numen*, 6, Leiden, 1959, pp.4-5.
- 37 Pettazzoni, 1980(1912), p.129.
- 38 de Martino, E., "Le scienze religiose e la cultura italiana" in AA.VV, *Raffaele Pettazzoni e gli studi storico-religiosi in Italia*, San Giovanni in Persiceto: Biblioteca Comunale G. C. Croce, 1969, p.77.
- 39 Sabbatucci, D., "Raffaele Pettazzoni" in *Numen*, 10, Leiden, 1963, pp.2-3., Giusti, S., *Storia e mitologia. Con antologia di testi di Raffaele Pettazzoni*, Roma: Bulzoni, 1988, p.87., Filoramo, G., Prandi, C., *Le scienze delle religioni*, seconda edizione riveduta e aumentata, Brescia: Morcelliana, 1991, p.73., Mihelcic, 2003, p.32.
- 40 Croce, B., "Postille" in *La Critica*, XXIII, Napoli, 1925, p.319.
- 41 Gandini, M., "Raffaele Pettazzoni nelle spire del fascismo (1931-1933)" in *Strada maestra*, 50, San Giovanni in Persiceto, Biblioteca Comunale G.C.Croce, 2001, pp.151-153.
- 42 Gandini, M., "Raffaele Pettazzoni dal gennaio 1934 all'estate 1935" in *Strada maestra*, 51, San Giovanni in Persiceto, Biblioteca Comunale G.C.Croce, 2001, p.175-176.
- 43 Gandini, M., "Raffaele Pettazzoni dall'estate 1943 alla primavera 1946. Materiali per una biografia" in *Strada maestra*, 57, Biblioteca Comunale G.C.Croce, 2004, pp.42-43, 129-131.
- 44 カロツツィのこの言葉にも注目したい。「イタリアという人文学発祥の国においては、近代的宗教研究の起源はルネサンスにまで遡る必要がある。まず指摘しておくべきは、ギリシア、ラテンの古代資料に対する文献学的批判研究であり、次いでイエズス会士を中心とするイタリア人宣教師の現地報告である。マテオ・リッチ(1552-1610)は中国、ロベルト・デ・ノビリ(1577-1656)はインドについて貴重な報告を残している。また、18世紀になると、ジャンバティスタ・ヴィーコの『新しい学問』(1744)や、ロドヴィコ・アントニオ・ムラトリ(1672-1750)の『イタリア事蹟文書集』、『イタリア中世故事集』といった著作が、イタリアの歴史や民俗の中の宗教的事象に対し、新しい見方を切り開いた。」ピエル・アンジェロ・カロツツィ(鶴岡賀雄 訳)「イタリアの宗教学」『図説世界の宗教大事典』、ぎょうせい、1991年、48-49頁。
- 45 Pettazzoni, R., (a cura di Brelich, A.), "Gli ultimi appunti" in *Monoteismo e Politeismo*, 2005, (1959), p.202.
- 46 筆者のインターネットでの調査による。非常勤教員、同一教員による講義も含まれている。
- 47 Giorda, M., Saggiaro, A., *La materia invisibile: Storia delle religioni a scuola. Una proposta*, Bologna: EMI, 2011.